

ブレイ、「ユートピアからの航海」

Bray, J.F., *A Voyage from Utopia*, edited with an introduction
by M.F. Lloyd-Pritchard, London, 1957.

上野 格

一九五七年にロンドンで一冊の奇妙な書物が出版された。カバーには、鋭いくちばしと蹴爪をもち蛇の躰をした雄雞が描かれており、本文の見出しには、[YARBF]なるえたいの知れぬ著者名と一八四二年という出版年が記されている。この書物こそ、一九三七年に Miss Agnes Inglis が草稿を発見し、以後多くの研究者がその公刊を待ちわびていた J・F・ブレイの「ユートピアからの航海」であった。

- (1) 本文の見出しは次の如くなっている。 *A Voyage from Utopia to several unknown regions of the world*, by Yarbfi, translated from the American, Leeds, 1842.

ブレイ、「ユートピアからの航海」

ブレイ、「ユートピアからの航海」

several unknown regions とは後に記す如く、イギリス、アメリカ、フランスを指す。書名から明らかなように内容はいわゆるユートピア物語の逆をゆくものであり、それに照応して、筆者名も逆に綴られている。

ブレイは初期英国社会主義の中でミネルヴァの梟の位置に立つ社会主義者である。彼は、一八〇九年に七人兄弟の長男としてボストンで生れた。父はリーズから移住してきた歌手、母はアメリカ人の踊子であったという。

彼は一八二二年に渡英し、印刷職人として各地を旅行しながら次第に社会問題に目を開いてゆき、三十年代には、主に Leeds Working Men's Association の設立者および理論的指導者として活動した。彼の主著「労働の受けている不法行為と労働の救済策」⁽²⁾は、この協会のために行った三回の講義 The Working Class their true wrong and their true remedy, を骨子とするものであった。コールによれば、ブレイのこの書物は表現の非常に改善された「オウエン主義・プラス・ホジスキンの」⁽³⁾であり、「反資本主義経済学とオウエン主義協同社会の学説のトムスンによる総合を一層発展させた」⁽⁴⁾ものである。コールのかかる評価は、「リカード派社会主義」におけるブレイの位置を正しく示すものといえる。この書物においてブレイは、ホジスキンの、トムスンらと同じく労働と資本の間の不等価交換を批判し、トムスンと同じく現存の社会を不等価交換に基づき階級支配の社会と捉え、政府・議会・法律がこの支配を維持するための諸制度であることを明らかにしている。また、未来像はオウエンの協同組合社会——正しくはトムスンのそれというべきであろう——と同じ発想で描かれている。しかし、生産力の現状の捉え方はトムスンはもとよりオウエンよりも鋭く、しかも、変革の主体を労働者階級と捉えるその仕方も、(そう捉えること自体が、オウエンを超えているのは勿論)、啓蒙宣伝に過大な期待をよせるトムスンとは質を異にしている。嘗てない程の富の生産が約束されていながら、収奪による困窮が限度に達しているという状況、社

会構成員全員が一日四乃至五時間も働けば十分豊かな生活が送れる程に生産力が高まりながら、労働者階級のみが十二時間もの労働を強いられるという現状、これが、いわば階級の自覚を促し、社会革命を必然ならしめる、とブレイは把えているのである。もちろん、オウエン的社会がその先に置かれていることは、かかるブレイの主張も、まことにイギリス的なあるいは「リカード派社会主義」的な文脈で捉えられねばならぬことを示している。しかし、そのためにかえって、われわれは、ブレイが、初期英国社会主義の枠の中で可能な極限にまで社会主義思想を高めた存在として捉えうるのである。彼が「半アメリカ人」⁽⁵⁾であり、初期英国社会主義者の中では例外的な労働者出身の思想家であり、三十年代に英国で活動した社会主義者であったことは、初期社会主義に多く見られるアメリカへの期待、ゴドウィン、ホジスキンの武器なき無政府主義、フランシス・ブレースらの改良主義、オウエン、トムスンの協同組合社会主義などの歴史的諸経験を批判的に克服して社会主義の理論と運動を新しい次元に高める可能性を彼が秘めていたことを意味する。だが、遺産を継承し、批判し、進歩させる点で彼はかなりわれわれの期待に応えながら、それを飛躍させ、次元を高める迄には至らなかった。彼は「オウエン主義とイギリスの反資本主義経済学説を最もよく綜合」⁽⁶⁾した社会主義者、初期英国社会主義のミネルヴァの梟だったのである。

- (2) Bray, J.F., *Labour's wrongs and labour's remedy ; or the age of might and the age of right*, Leeds, 1839, これは L.S.E の Reprint におおめられている。書名中の Labour なる語は Labouring Class (又は Working Class) の意味であるから、書名の意味を正しく伝えるためには、「労働者階級のうけている不法行為と労働者階級の救済策、又は、力の時代と正義の時代」とでも訳すべきであろう。

ブレイ、「ユートピアからの航海」

ブレイ、「ユートピアからの航海」

(3)(4)(5)(6) Cole, G.D.H., *Socialist thought: the forerunners 1789—1850*, London, 1955, P. 133, 118, 132.

このような意味で古典的な位置にある彼の著者も経済的には著者の救済にならず、かえって苦難を増しただけであった。主張は大体のところ好意的に迎えられたらしいが、中には、空想的で実行不可能との批判もあった。この種の批判に答えて、先の主著の内容の正しさをイギリス、アメリカ、フランスの具体的な社会批判によって立証せんとしたのがここに取上げた「ユートピアからの航海」である。これは、難破したユートピア人が救われ、Brydone の首都 Londo, に行き、更に Amrico, Franco, なる国々にも旅して、これらの国々の不正、野蛮、無智を克明に記録するという形をとっている。

(7) Bray, J.F., *Voyage*, p. 35. 「一八七三年二月—これは一八四〇年と一八四一年の間にイングランドで書かれた—一八四二年の始めに私はそこを去ったので。今はミシガンにいる！ 一八七三年。批評家共が私を Utopian だと考えたので、私は Utopia の外には一体何があるかを示すためにこれを書いたのだ。」
ブレイ（一八九七年没）の生涯については、本書に付されたロイド・ブリチャードの序文を参照されたい。なお、三田学会雑誌55巻1号〜4号に遊部久蔵氏がブレイの発見史、同著述及び研究文献目録、評伝をよせておられる。

本書は「ユートピア語」から英語への翻訳者 J・F・ブレイの序文と十章からなる本文とで構成されている。

各章には標題が付けられていないが、大体、次の如き問題が扱われている。

第一章 Londo の印象、Anglo 人社会の奇妙な階級構成、政府・議会の役割。

第二章 Aristocs（貴族階級）Commos（労働貧民）の生活と Polos（警官）の役割、宗教。

第三章 宗教の教義（迷信）とそれからの解放の動き。

第四章 諸階級の発生原因と現状、支配・寄生階級の相互の役割、戦争論。

第五章 法・裁判の性質と Sharkos（裁判官、弁護士）の役割、政治犯の法廷での名演説、体制維持と植民地獲得のための Pestos（牧師）の役割、Erino（アイルランド）問題。

第六章 婦人問題、出版物と階級支配および解放運動の関係、社会革命の予測。

第七章 社会生活・風俗・習慣、治安当局および政府の役割。

第八章 Amrico の社会問題、黒人問題。

第九章 Franco の社会問題、大革命の成果と欠陥、三国の印象の総括、機械の発達とその影響。

第十章 三国の歴史の教訓 社会革命への展望。

以下、ブレイの叙述を、一、市民生活の貧困、二、階級構成、三、階級支配の実態、に分けて要約する。

一、市民生活の貧困。ユートピア人は、まず、千七百万人がひしめく小さな島国 Brydone の港に着く。この国には Anglo 人が住んでいる。港で彼はまずその混乱ぶりに驚く。船員たちは全く身勝手なで、故意に他の船の妨害をしているようなのである。はしけに乗ると税関の役人が荷物の検査をする。外国から有害な品物が送り込まれるのを防ぐのかと思うと、実はこれが専ら密輸取締りであって、関税を払っている物品なら、タバコ、火酒などという有害この上ない代物でも無制限に通してしまう。何故なら、これらの物品には重い輸入税が課されており、政府はこれで巨額の国庫収入を得ているからである。Londo は、百万を超すその住民が世界最大を誇るこの国の首都であるが、そこには大小様々の家屋が密集し、朝から晩まで騒音が渦巻いている。道路は狭く曲りくね

ブレイ、「ユートピアからの航海」

ブレイ、「ユートピアからの航海」

り、降ればどろ沼晴ればほり、に悩まされる。町には花も小鳥も甘い微風もなく、貧民街では路上いたるところに汚、わい、の山と汚水のたまりが出来ていて、その毒ガスで住民は病気になる程である。車馬の交通ははげしく、老人子供の歩行は危険きわまりなく、交通事故による死傷者は大変な数に達している。住居条件は甚だ不平等で、大邸宅がある反面、大多数は小さな家に住み、しかも家賃なるものを支払わねばならない。獣の巢に似た穴蔵に住む者も多く、また、アパートで部屋借りしている者も多いが、お互いは全く他人で、まるで数マイルも離れて住んでいるかの如く疎遠である。目貫き通りには商店が軒をつらねており、様々な商品を陳列しているが、奇妙なことに、この商品はそれが必要としている人々の手に殆んど入らない。それは貨幣と引換えでなければ入手できないのであり、必要としている連仲の大部分は貨幣を持っていないからである。街中いたるところにポロをまとい飢えた人々がやたらといるが、誰もそれを変だと思わず、その原因を知ってもいない。罪は当人にある、と飢えてない連仲が了解しあっているだけである。家に鍵をかけるという奇妙な習慣がこの国をはじめ全ての国にはある。そうしなければ値打ちのある物を根こそぎ盗まれてしまうからだ、たしかに、これほど惨めな人間が多ければその危険は十分あり得ることである。（このような、われわれの今日の生活を思いおこさせられる如き叙述は全篇いたるところに見出される。今日の生活を思いおこさせられるのは、ブレイの批判が、貧困の単なる摘出に留らず、それに起因する人間の疎外された状況、価値観の転倒というま、に現代的な問題に焦点をあわせて行われているからである。）

二、階級構成。この国の人間は大きく分けて二つの階級からなる。一方は、住民の大部分を占める carrying class や *commos* とよばれる。他はそれに荷われている階級である。Anglo 人に限らず、同じように野蠻、他の

国々の人間も、ニュートピア人と本来は同じ人間なのだが、現実にはその大多数が甚だゆがんだ軀つきをしている。それは、背中に *constituo wind-bags* または *substantial-nothing* と呼ばれる重い羊皮の袋を六個荷っているからである。これは、目には見えるが触れることは出来ず、肉体の一部にさえなっていて死んでもとれない。これは、社会構造に由来するもので、六種類の人間——支配・抑圧階級——をあらわしており、全体が他人の労働に寄生するという共通の性質を持ち、重なる順序の変えることはあるが決して分離することはない。頂上に位するのは獅子と豚を一つにした太った顔で、支配者 *Kin-kin* (時には *Quen-quen*) をあらわす。次は雄牛と豚の合成で小支配者 *Aristoc* である。第三は豚とハイエナの合成で *Pesto*、出生から死後の法事まで人を喰い物にする連仲である (名称は *pest* と *priest* から作られたのであろう)。第四は豚と狐の混合で鬼火の如く無気味な *Sharko*、又の名を *Propper-up* という (これは裁判官および弁護士をあらわす。彼らは被告の袖の下と弁護料の額で動く、つまり *share* と *proportion* がその原則であり、しかもさめの如く——*shark*——強欲だというのが名称の意味であらう)。これが主要な階級であって、共に聖なる象徴——豚 *hog* を持っている。第五位は鼻とさめの結合で金の目と紙の羽毛 (つまり金貨と紙幣) を持つ *Rido-commo*、又の名を *Lasho Squeezo* ともいう (労働者を鞭打ち、絞りあげることから後二者の名称がつけられているのであろう)。最後は青と赤に彩られた雄雞と蛇の結合、*Soldo, Polo* である。これら六種の重い袋を荷っている *Commo* (労働貧民) が、この重荷を投出したいなどとはんの一寸でも考えようものなら、この化物は即座にその頭に毒牙を突込む。*wind-bags* 全体の安全は直接にはこの階層の働き如何にかかっているのである。

これらの *wind-bags* が *commos* の背に乗るようになったのには、長い歴史がある。今では探ることさえ無
ブレイ、「ニュートピアからの航海」

ブレイ、「ニュートピアからの航海」

意味なる理由によって、まず aristocs が、本来は全住民の共有財産だった土地を私有した。commos の一部は生活のために aristocs から土地を借りその代償に地代を提供するようになった。まず aristocs がこうして富裕な commos の背に乗った。次に、土地を借りる力のない他の commos が、aristocs への地代と富裕な commos への食料を代償にそこで働くようになって、commos に分化がおこり、一方が他方の背に乗って rido-commos になった。やがて、家屋、道具、船、衣服その他の商品についても土地と同じことがおこり、富を得た rido-commos は土地を買入れて aristocs の仲間入りをするようになった。従って、この関係が変らぬ限り彼らはいつまでも背に乗って、commos を苦しめ続けるのである。だが、この乗っている連仲にも不安はある。commos の反乱は最も危険であり、また、富を得れば commos が他人の背にのれるが、rido-commos や aristocs も富を失えば commos に転落せざるをえない。更に、Kin-kin もいつ他の aristocs に蹴落されるかもしれない。かくして、社会には常に不安が絶えず、現秩序を維持するために、宗教、法律、警察及び軍隊が必要とされるのである。

三、階級支配の実態

a、国家機関。この国は君主制であって、Kin-kin, aristocs 及び rido-commos からなる mixed government で統治されている。しかし、rido-commos は実質上 aristocs であるから、Kin-kin と aristocs が統治機関を構成しているといえる。彼らは統治すると称して実は搾り取った莫大な金で飲み食い踊っているだけである。政府の目的は人民を重税で苦しめ、それを政府に関与している aristocs の間で分け取ることにはかり向けられていて、生産と分配を規制して全人民の福祉を保障することなど全然眼中にない。統治に当る aristocs の数はそれほど多くなく、税収は莫大であるから、彼らがいくら浪費しても高が知れており、残りの大部分は、侵略と

国内弾圧のための陸海軍維持に向けられている。役人には上から下まで全部富を持つ者だけが選ばれる。その為十二人中十一人までは最低の人間で、自分の仕事など何一つ知らず、上にはへつらい、下には残忍無情である。

議會は二院制で、*rido-commos* が構成する一院は *aristocs* 以外の全社会を代表すると見做されているが、住民の大半を占める *commos* には選挙権もないので、実際には代表ではない。法律は全部議會で審議される。*commos* を搾取し奴隷化するために *aristocs* が制定した法律は無数にある。時には *commos* を安心させるために、*aristocs* の特権を削り *commos* に特権を与えるような法案が提出されるが、こうしたものは何年も審議がくりかえされるばかりで成立したためしがない。審議では演説と怒号が渦巻くが、それは「ギャーギャー、ブー、ニャーニャー、ワンワン、コケコッコー」といったさっぱりわけのわからぬものである。ところが奇妙にも、*Anglo* 人たちはこうした統治機構をえい智の結晶で周囲の国々の羨望の的だと思っているのである。

b、宗教。*Anglo* 人は日曜ごとに教会にゆき、そこで *pesto* の説教を聞き、献金をする。彼らは *Flocuso* という書物に記されている馬鹿げた話を妄信している。それによると、全能の神 *Fe* は七日にして無から意志の力のみで全世界を創造し、人間を創り、後に自分のしっぽを少々切りとって *Fo* を作り、それに人間の罪を救わせた。但し、この全能の神がどのようにして存在するに至ったかは書かれていない。住民達は、礼拝し *peso* に献金すれば死後 *Blesso* に昇れるが、それを怠ったり *wind-bags* の安全をおびやかしたりすると、*Blazo* に落ちて永劫の苦痛にあえがねばならぬと教えられている。彼らの神は *Fe* であるが同時に *Fo* であり、又 *Fum*(聖靈)でもあって、ふつう *Fe-fu-fum* と呼ばれ、三位一体であるという(かかる宗教をもたぬニュートピア人にはこの話は遂に何のことか理解できなかった)。こうした迷信を説くのが *pestos* である。彼らは人生の慶弔禍福から、

ブレイ、「ニュートピアからの航海」

ブレイ、「ユートピアからの航海」

死後の法事まで一切の行事を司どり常に多額の献金を強いる。強欲な aristocs, rido-commos もこの点では pestos に遠く及ばない。彼らの社会的役割は commos を社会秩序に従わせることである。つまり、彼らは、生れた子を前にして両親にその子を現秩序に従わせることを命じ、成人すると本人にそれを誓わせ、死刑囚に教誨し、戦場では味方の勝利を神に祈り（両陣営で同じ神に祈るからさぞ神様が困るだろう、とユートピア人は考える）、海外布教と称して民衆から大金を集めては黒人の住む未開地に赴いて土地・財産・奴隸用黒人を奪いとり、そこにありとあらゆる社会悪を持込む。次に軍隊が侵入してその地を植民地とするのがいつもの順序である。全能の神は一人なのに、その教えに従うと称する宗派は無数にあり、またその神が宿ると称する教会なる建物も無数にあり、僕たる pestos―出身は元来は aristocs であつたが現在では rido-commos からも多い―数が多い。彼らを養うために commos は大変な重労働を行い、身心ともに最低の条件におかれている。一寸でも考えてみればこの不合理は明らかであり、それに気付いている者も少くないが、残念なことに、pesto は婦人を把んでおり、育児・家庭教育を通して pesto への盲信が年々再生産されているので、このままでは改革は非常に困難である。しかし、かかる迷信からの解放を求める運動も一部にはおこっている。

c、裁判と刑罰。法律を犯した者は裁かれ様々な刑に服する。奇怪なことに、死刑などというものもある。aristocs は夜毎酔っては街で乱暴を働き、commos の家をこわしたり、婦人に暴行したりするが、magos（治安判事）は同じ階級の者であり polos（警官）は専ら aristocs の生命財産を保護するための存在であるから、かかる乱暴者が罰せられることはまずない。一方、commos には、法律がどうなっているかも知られぬので、何かといえは重い罪に処せられ、しかも一度そうされると、刑をおえても、何ら更生の道がないため一生をだめにされ

てしまう。

この社会の法律の大半は *commos* の自由と幸福を犯すものであって、その内容は次の如くなっている。① *magos, soldos, polos* が *commo* に与える不幸に逆うな、② *rido-commo* が背にのるのを妨げるな、③ *pesto* に従い、きちんと献金せよ、④ *aristoc* をうやまい、裕福に暮させ、打たれても蹴られても我慢せよ、⑤ *Kin-kin* を最高におそれかしこめ、彼は *commo* 同士を国の内外で戦わせることその他一切の権利をもっている、⑥ 法はすべて *aristocs* と *Kin-kin* による以外には決して変更できない。

こうした法の下で、疑いをもたれた *commo* は未決に入れられ、半年以上も留置され、無罪になっても補償もされない。だが、こうした法的・宗教的状态の下でも、社会の不合理を認識し歴史の研究によって人類の進歩への確信を得た若者は次第に同胞の解放を公然と主張するようになる。ユートピア人は、こうした政治犯の一人が、*sharlo* による弁護を断って、自ら法廷でその主張を堂々と開陳するのを傍聴し感激する。この青年は、裁判が単に強者の弱者に対する不正でしかなく、今裁いている者は、次の時代に自分達に加えられる裁きの先例を自らの手で作っているのだと非難し、日々社会を改革している「時間」という名の最大の政治犯には裁きの手が及ばぬではないかと嘲笑し、自分のやったことは、たかだか、この「時間」が明日やりとげることが今日やろうとしたにすぎないが、権利の侵害に抵抗するのは自由を愛する者の義務であると説き、後に続く者のあることを信じていると結ぶ。この青年は勿論死刑になるが、最後まで *pesto* の教誨を受入れなかった。

d、婦人問題。この国の結婚生活は殆んどが不幸そのものである。女は知的肉体的に男に劣り、男に頼らねば生きてゆけぬという誤った通念の下に教養育てられ、実際は男と同じ能力をもった人間なのに、法的にも全く無

ブレイ、「ユートピアからの航海」

権利である。そのため女は、男の気をひこうとして、化粧し、軽薄な知ったかぶりをする。男はだまされて結婚するが、得物を手にした女達はすぐに自ら化の皮をはいしてしまうので、夫婦の愛情は何ヶ月もたたぬうちに冷えきってしまう。富裕な階級は慰謝料を払えるから、離婚して、別の結婚生活を営むこともできるが、*commos*にはそれもかなわぬ。男の仕事は一日十二時間もの長さで、疲れて本も読めないが、とにかく一定の時間をすぎれば自由になるから、飲みによくぐらいいはできる。一方、女は、娘時代の女中奉公も結婚してからの家事労働も（大部分は下らぬ雑事であるが）、朝おきてから夜ねるまでのべつ行わねばならぬので、知的向上どころか娯楽の暇もない。だから、夫にはますます家がおもしろくなくなり、夜毎酒を飲みに出て、家庭が父を必要とし金に困っているのを知りながら、帰宅せずに浪費してしまう。女の唯一の楽しみは、教会で女同士が見たり見られたりし、又、*pesto*の説教に感激することである。*pesto*は、海外布教報告と称して、黒人の女性は、不幸にも男と同じ、重労働をさせられている、と教える。黒人女性の重労働とは、実は、農作業などの生産的労働（植民地化される前の健全な肉体労働）のことで、女性が一人前の人間であることを証明するものである。ところが白人の女達は、黒人の女性が恐怖で目を吊りあげそうな下らぬ仕事で日夜あくせくしているくせに、白人に生まれてよかったと胸をなでおろす。かくして、女性は、軛を抛つかわりにすべてを耐えしのぶようになり、育児を通して、迷信と現状に安んずるよどんだ精神とが代々再生産されることになる。だが婦人たちも遠からずこうした長い間の苦役からの解放を求めるようになろう。すでに少数の目覚めた婦人達はそのための活動を始めているのである。

e、解放への道。*commos*は男女ともこのように苦しんでいるが、*Brydone*では実際はもうそのような苦役は不要なのである。何故ならこの国はすでに *Utopia* に殆んど劣らぬ程に発達した機械と肥沃な土地を持ってお

り、住民が平等に四〇五時間も働けば十分豊かな生活が出来る筈なのであるから。そうならないのは、社会と政治の制度が誤っていて働く階級と寄生する階級とがあるためである。aristoc も時々社会改革を口にするが、commos は度々彼らにあざむかれてきているので、警戒せねばならぬことを知っている。今では専ら、苦しみ悩んでいる commos のみが社会のよりよい姿を探り求めているのである。

この国には多くの刊行物があり、それは大体が夫々各階級の利益を代弁している。日刊・週刊の刊行物の大部分は全く無資格な連仲の手で運営されており、まるで、下らぬ仕事でオベッカをつかったりゆすったりするのが本業の如くである。もっと刊行期間の長い刊行物はずっとましな人によって運営されているが、そういう人達の意見はなかなか聞かれない。こうした刊行物の政治的社会的問題の扱い方には三通りある。第一は aristoc の側にたつもので、Kin-kin と aristoc は神の定めた秩序に基いて存在を得ているのであるから commos は従わねばならぬと主張する。第二は commos の側のもので、aristoc の言い分を嘲笑するが、大体は、弾圧をおそれて現状肯定になる。しかし中には、aristoc に、搾取を少くせぬと、背から振落すぞと脅かすものもある。第三は力より欺瞞の方が安全だと考える aristoc と、aristoc に憧れる rido-commos の代弁。これは commos ともうまくやろうとするので社会的には広い層を対象に持つが、先の両者からは軽蔑されている。正義は commos の側にあるので、刊行物を通しての争いに（事実上は二対一の争いであるが）commos は不正な手段をとる必要がない。

commos は労働以外には何も持たぬので、職を失ったら飢えて死ぬしかない。つまり、Brydone びな、commos は、搾取されるかさもなければ飢えて死ぬかのどちらかしかないように、社会が組織されているのである。

フレイ、「ユートピアからの航海」

フレイ、「ユートピアからの航海」

comos には、もう、そうしたことがかなりわかってきており、社会革命による大改革が近づいているように思われる。comos は苦しさに刺戟されてたちあがり、ユートピアが初期に経験したと同じく、試行錯誤をくりかえしながら、次第にそのあり方を正しくきめてゆくであろう。

このような鋭い観察と批判を行ったのち、ユートピア人は、アイルランドの悲惨な状況、即ち、住民は肥沃な土地に恵まれながらイングランドとアイルランドの貴族に搾取されて飢えており、生活できぬ農民はイングランドに移住して産業予備軍の役割を果し、イングランド人労働者と鋭く対立し、そのため、共通の敵を認識できず、自らの悲惨を一層強めている状態を指摘する。アメリカには、第二のユートピアではないかという期待を抱いて行くのだが、実はそれもイギリスに酷似しており、黒人奴隷の存在が白人奴隷の状態をも日増しに悪くしているだけなのを知る。フランスを取上げたのは、大革命を経験した国だからであるが、あれが単なる政治革命で社会革命にならなかったため、社会は革命以前に逆もどりしてしまったのだと知る。大革命の失敗は、破壊のみを知って次に何を作りあげるべきかを知らなかったためだと彼は主張するのである。

本書の内容は大体以上の如くである。不幸にも、おそらくは経済的困難と批判があまりにも急進的であることとの故に、本書は出版されず、草稿のまま百二十年近く埋れねばならなかったが、もし刊行されていたならば、運動に大きな影響を与え、非常に高い地位を社会思想史上に占めていたものと思われる。トムソンの割愛した百頁が依然として発見されぬ現在では、本書は、初期英国社会主義者の、社会を全体として把え具体的に批判した文献としてわれわれの入手しうる最良の書物ということができよう。

(8) 拙稿「タムスンの『富の分配』」成城大学経済研究第十四号一八〇頁参照。トムスン、ブレイとも社会批判の出版を中止したことは、一八二〇〜四〇年代のイギリスには未だそれだけの自由が社会的に存在しなかったことを物語るの
であろうか。